婦人と子ども

家庭の音樂

人の音樂を嬉む情は、以て生れた天性であつて言はば自然の本能である。故に、生れてから、數週間も經つた常態の子供であつて、音樂の愉快を感じない者はない。心理學者の說に依ると、生れて僅か二週間經つた子供が、耳を傾けて隣室のピアノを聽いたといふ位で、六七週間も過ぎると、樂器や唱歌を聽かせると、手や足などまで動かして喜んで居るのは、子供を持つた人の經驗する所であらう。若し、彼の單純で、粗朴で、愛らしい子守歌といふものがなかつたならば、如何ばかり幼兒社會は殺風景になっ

て仕舞ふ事であらうか。「坊やのお守りは何處へ行った」や、「坊やは善い子だねんねしな」の歌などが、どれ程、小さい彼等の胸に、美の福音であり、喜の慰安となるのであらうか。彼の有名な音樂の大家のモツアートといふ人は、小さい時、毎夜、お父っさんと唱歌してからでなくては、決して眠に就かなかつたといふ話である。

斯樣に、極早い子供の時分から、人の心に備はって居る音樂的本能の敎育は、餘程早くから大切に考へられた。今を去ること、二千五百年も前に於て、彼の希臘の雅典に在りては、人の精神を高尙にし、之に慰安を與へ、物事の秩序規律などを愛する習慣を得しめるといふ考から、盛に音樂の敎育に力を盡したが、仝じ國の斯巴兒多に在っては、これは、非常な軍事敎育を主張したのであったが、夫でも、愛國の情を喚起したり、忠魂義膽を養成せんが爲めに盛んに少年の唱歌音樂に力を用ひたものであった。そして、此二國とも何れ劣らぬ强國となつた事は、歷史上名高い話である。

か樣な次第で以て、近頃に至っては、何處の學校でも幼稚園でも、音樂唱歌といふものは、缺くべからざる敎科となって居るのである。

かゝる音樂の敎育上の功果に申すまでもない事であるが、ざつと一言して見ると、

第一、心情を快豁にするのである。面白からぬ心の屈托でもある時、愉快な唱歌でも歌ふ、勇壯な曲でも聽く、精神忽ち豁如として一切の憂鬱煩悶を洗ひ去るのである。

第二、美情の養成である、美しい繪を見たり、音樂を聽いたりする事は、美の嬉好を長じて、精神を高尚ならしめ優美ならしめるのである。

第三、同情心を養成するのである。唱歌を歌つて、英雄の心を動かしたとか、無情の動物まで感じさせたとかいふ話は、古い歷史に澤山ある事でないか、唱歌が人の感情を動かす力は極めて著るしいものである所から、つまり他人の苦や悲に對する深い同情の心は、第一番に之で養はれる、殊に、大勢が一所になつて歌ふ時などは、其一所に歌ふ人々の心を結んで一とし、所謂共同和樂の感情を甚だ强固にせしめるのである。

そこで、以上述べた、人間固有の本能から見て、音樂の敎育上の効果から見て、余は、我國の家庭に是非とも、此音樂の輸入を主張するのである。實に家庭は兒女本然の敎育所である、家族の慰安所であつて、活動力の兵站部である。子女の敎育の中で家庭の敎育が最も大切で自然であつて見れば、此家庭敎育の場所に於て、先天的に子女の嗜好に適合して居る音樂を用ゐないといふのは、甚だ意を得ないと思ふ。又家族の者に取つては、家庭は、實に社會の風波を避くる港である、砂漠中のオアシスである。吾等は此處に、風破の危險をも避け、砂漠旅行の疲勞と饑餓とをも滿足させて、更に新らしき前進の勇氣と活動力とを恢復する根據地である。社會に出でゝ吾等が遭遇する幾多の失敗も幾多の煩悶も、此處に來ては見事に修繕恢復せられんければならぬ。此點から見て、家庭に音樂の輸入のどれ程効果があるか

知れよう。

一週一度の土曜日の夕、日曜日の朝、さては、毎日の夕食の後、或時間を定めて父も母も姉も妹も小さい弟に至るまで、オルガン可なり、ヴイオリン宜し、ピアノ大に可なり、一様に其側に集つて合唱する習慣にしたならば、全家族の心を結んで一となし、和樂團欒の情を一層強からしめ子女教育の上に於ては勿論、家庭をして神聖なる慰安所たらしむる上に於て、最も有功なる方便とならう。

若し夫れ、各家庭に於ては、各自、好む所に從つて、一定の家庭歌といふものを定めて、之を祭日に唱ひ、父母子女の誕生日に唱ひ其他家庭の祝ひ日に唱ふ用に供するが如きは、最も趣味ある事と思ふ。

此の如き事は、別に大した費用も要らないで、其實行も、今時の教育を受けた主婦に取つては、極めて容易な事と考へる。余は、彼の家庭の改良を叫び、理想の家庭を唱導する所の人々が、何故、この趣味あり、有益なる、且つ、實行し易き方法の輸入を計らずして、徒らに不合理なる夫婦同權論などを振り廻はして、結局、其理想を實現する能はざるのみならず、反つて、屢々、悲慘の境遇を演出して省みざるかを怪むのである。

（牧羊）